

氏 名	朝 倉 優 佳
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	甲 第 26 号
学 位 授 与 日	平成30年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目	内なる他者との出会い —ファッションと絵画のコラボレーションをめぐる民族誌的研究
審 査 委 員	主査 女子美術大学大学院教授 大 森 悟 副査 女子美術大学大学院教授 福 士 朋 子 女子美術大学大学院教授 関 直 子 女子美術大学大学院 特別研究指導教員・客員教授 北 澤 憲 昭

内 容 の 要 旨

筆者は、2015 年以降、ファッションブランド「ヨウジヤマモト」の要請を受け、画家の立場からファッションとのコラボレーションを展開し、その集大成として2016 年には東京オペラシティアートギャラリーにおいて「画と機山本耀司・朝倉優佳」展を開催した。

この論文においては、2015 年のコラボレーション開始時から今日までに至る自身の体験を記録していたノートをフィールドノートとしてたどり直すことで、文化人類学における民族誌的手法に倣う研究を行った。文化人類学は、研究対象との交流というフィールドワークの記録にもとづいておこなわれるが、筆者にとって異分野であるファッションとの出会いの体験を「参与観察」として——相互に影響を与え合う動態的な観察として——捉え返すことを試みたのである。

こうした手法をもちいるにあたって、ジェイムズ・クリフォードの『文化を書く』を参照し、方法論上の重要な数々の知見を学んだ。その重要な点を列挙すれば、(1)多声的叙述の意義、(2)筆者が調査者であり当事者であること、(3)他者と出会う一方で、それは自己の構築でもあるということ、である。観察結果の分析は、「コラボレーション」をキーワードとして行い、その結果として、異分野間の相互的連関が創作活動に大きく影響を与えることを確認した。(1)の多声的叙述については、ファッションと絵画、そしてデザインと企業としての活動といった分業を「多声」性と捉え返した。さまざまな立場からコラボレーションに参加したひとたちの声をできる限り記録に残すことで、踏み込んだ分析はともかく、さまざまな声が交錯するポリフォニックな空間の描写はできたように思う。これが、「コラボレーション」としての制作について考察するうえで重要な意義をもったことはいうまでもない。

僥倖ともいふべき得難い貴重な体験を、知のネットワークの広がりの中に位置づけることで、自身に引き寄せ、主体的に]捉え直すことで今後の創作活動の動機をつかみとること、それがこの論文の目的とするところである。

第一章 ヨウジヤマモトとの出会い

山本耀司との出会いは2013年であった。女子美術大学でファッションテキスタイル科の客員教授である山本の絵画制作の助手として、洋画科の教授から推薦を受けたのである。その半年後、ベルリンでヨウジヤマモトのショーをはじめて目の当たりにするが、絵画を介する交流のなかで、ファッションとのコラボレーションに関心を引かれ、山本は長年の希望であった絵画制作への意欲を高めていった。

本章では、山本との出会いから、ヨウジヤマモトとのコラボレーション、そしてその先に待つ「画と機」展へ至る過程を、言葉と画像によってたどりなおす。

その前提として、出会いに至るまでの山本・朝倉双方の仕事を、まず跡づけた。そのさい、山本の高橋にわたる親交が、山本自身の創作へのモチベーションに深くかかわっていることを認識した。他者との交流を育むことは、異分野との出会いとも重なり、その出会いは自身の創作へのあらたな契機となるのである。筆者は山本とのコラボレーションを行うまで、創造性というものが孤高性において現れ出るものだという思いを抱いて生きていた一人であったが、その考えが第二章で述べる、コラボレーションの経験とともに徐々に変化をみせていった。

筆者の活動については絵画制作についてだけではなく、以前から取り組んでいた壁画制作にも触れた。壁画制作はコラボレーションという異分野への越境の契機となった活動であり、「画と機」展においてはファッションとアートを繋ぐ装置ともなったからである。

第二章 コラボレーション

エルザ・スカパレリとサルバトーレ・ダリによるコラボレーションや画家のソニア・ドローネーの服飾デザインへの展開など、20世紀はじめから今日に至るまで、ファッションとアートの交流は頻繁に展開されてきた。

近代の美術は、美術それ自体の追究を特質とする純粹主義に支配されてきたが、19世紀末を起源として20世紀に展開されるアヴァンギャルド運動においては、異分野の接触、交流、協働がさかに行われるようになり、それぞれのジャンルを踏まえつつ共同制作の実験が繰り返された。

こうした異分野間の共同作業は、他者間の対話や交流によって生じる事象であり、「コラボレーション」という語で大きく括ることができる。アーティスト同士の刺激であれ、作品による触発であれ、また、現実であれ想像上であれ、すべては他者間の対話や交流として捉え返すことができるのだ。

2015年から展開されたアパレル企業「ヨウジヤマモト」及び山本耀司と著者とのあいだに繰り返された出来事を、この章では、「コラボレーション」というキーワードを介して20世紀アヴァンギャルド芸術の延長上において捉え、論文全体の軸線を明確にした。

具体的には、以下の二つのやり方で筆者たちのコラボレーションは展開された。(1)絵画(平面)を服(立体)へと、プリントという形でおこす、(2)服に絵画を描くという二つである。これは筆者と山本のあいだのやり取りであるにとどまらず、たとえばファッションブランドとしての企業活動や、店舗などのかかわりにおける、多くの人々との膨大な協働作業をとまなうものであり、それが後に「画と機」へとつながっていくのである。第一節・第二節では、筆者と山本とのやり取りを軸に、約三年間の多様なコラボレーションの軌跡を述べた。

服は服だけでは終わらない。デザイナーにとっては、服は、ファッションショーによって一応の完結するのである。服をまとい、歩き、人間の肉体の厚みと動きが伴うことで服は服としてはじめて成立する。

また、ファッションの背景にある、精神、視点、主張、理念、コレクションのテーマなどは、ショーという総合芸術によって語られるのである。

第三節では服飾の集大成としてのショーについて、そして筆者が以前から取り組んできた壁画と関連する、2015年から2017年までおこなわれたヨウジヤマモト青山店・パリにあるカンボン店における店舗装飾について取り上げ、多くの人々が行き交う店舗という場での人々との対話が制作行為への契機となり、壁画はそこを訪れる人々と共鳴するかたちでつくりあげられることを確認した。服と人、人と壁画、そしてそれらを覆う建築が、互いに関係づけられることによって様相を変えていくのである。それぞれにおけるコラボレーションの脈絡を辿りながら第三章において述べるファッションショーとは異なる総合芸術の場といえる「画と機」展への道筋を明らかにした。

第三章 「画と機 山本耀司・朝倉優佳」展

約二年間の多岐にわたるコラボレーションを経て、2016年冬に「画と機」展が開催された。この展覧会はファッションデザイナーが絵画の制作をおこない、絵画を専門としてきたアーティストが服飾にかかわる仕事をおこなうという異分野間のやり取りがひき起こした結果を提示する試みであった。会場には、コラボレーションによって発表された服や両者の絵画作品を全体が一種のインスタレーションとして成り立つように展示することで、互いの表現活動が触発し合う有りさまを示すことを目指した。

ファッションとのコラボレーションにかかわる他の場面もそうであったが、この展覧会においても、美術館のキュレーターをはじめ、多くの人々との共同作業が重要な意義をもった。「画と機」という顕在的なコラボレーションに至るまでの潜在的な経緯は、いうまでもないことながら、この展覧会の空間をつくりあげるうえで不可欠であった。したがって、この章では、展覧会場での展示に至るまでのコラボレーションの過程についても言及した。

この展覧会は、作品は作家ひとりでつくりあげるものであるという筆者の－そして近代画家の多くにみられる－固定観念に大きな変更を与える契機となった。創造性が成り立つまでには、さまざまな人間関係のはたらきがあり、作品とは、さまざまな文化的、社会的、もしくは政治的な文脈をもつ人々との関係の、あるいは、それにまつわる記憶の結節点である。コラボレーションにかぎらず、制作とは、この結節点を作り出す行為にほかならないのである。こういう発想に筆者を導くうえで、それに先立つファッションとのコラボレーションが大きな契機となったのである。

終章

「コラボレーション」とは、collaborate＝「共に働く」という原語の意義どおり、異なる分野、他者間のやり取りを、すべてを指すことができる。これまでに述べてきたように、創作活動が成り立つには、さまざまな関係性が必要となる。異分野、他者への越境はあらたな自己をみとめることにもつながり、他者と出会うことで自己のなかにある他性に出会う契機となるのだ。歴史上のあるいは同時代の他者の作品からの影響はもちろんのこと、作家同士のやり取り、また、周囲の人々との膨大なやり取りが、創造の基底を成しているのである。

筆者は、「画と機」という展覧会を通して、こうした創造の基盤について強い実感と確信をもつことになった。どのような創作活動においても、ひとりでの制作はありえないのだと確信した。筆者においては、モチーフに対する解釈・色彩への意識の変化として、あらたな制作における契機がみいだされた

が、ひとりで行う作業の時間が如何に重要であろうとも、制作の動機の成り立ちには、多くの存在がかわっている。創造的活動は、潜在的であれ顕在的であれ「コラボレーション」において、すなわち、他者と共に為す過程のなかで、他者から影響を受け、また、他者に影響を与えるという関係のなかで活性化されるのである。

この論文にしろした約三年間におよぶファッションとアート、さらに、両分野にわたる人々とのコラボレーションの体験は、今後の創作活動における新たな動機の形成につながってゆくにちがいない。この論文は、その予期的な理論化であり、具体的な体験を、より精神的な「経験」と呼ぶにあたいするものとするための企てにほかならない。

審査の結果の要旨

朝倉優佳の学位請求論文「内なる他者との出会い－ファッションと絵画のコラボレーションをめぐる民族誌的研究」は、大学院在籍中の自身の制作活動について考察したものである。

審査は以下のプロセスで行われた。平成29年10月16日に博士後期課程学位審査事前作品審査を行い、審査員の全員一致で学位申請に係る研究作品に足り得ると判断された。平成29年10月16日に予備申請が行われ、上記担当者により、平成30年7月7日に第1回予備審査を行った。その後、平成30年8月6日に第2回予備審査を行い、前回の予備審査の指摘に基づく加筆修正箇所を確認した。更に、平成30年8月6日から10日まで本学美術館(JAM)において研究作品の公開審査が行われた。そして、平成30年9月12日、論文発表会に続き、最終審査を実施した。以上のプロセスを踏み、9月3日に本申請された提出論文は審査員全員一致で合格と判断された。

大学院の修士課程と博士課程で洋画を専攻した朝倉は、カンヴァスに油彩を用いた絵画作品を制作することと並行して、2015年からファッション・デザイナーの山本耀司とのコラボレーションを行った。本論は、このファッションの世界のデザイナーとの3年にわたるコラボレーションの体験を記録した自身のノートをたどり直し、文化人類学における民族誌的手法に倣い、この間の活動の意味を検討したものである。筆者は以前より絵画制作の際にはその構想やその実現についてテキストとして記すことを常としてきたが、コラボレーションの期間は自らの制作のみならず、画家である自身にとって異分野であるファッションの世界での知見を余すところなく記録していた。そこで、これら民族誌的ノートの記述を核に、相互に影響を与え合う文化人類学における参与観察のように、コラボレーションで関わった多くの人々の声をひろい、関わった人々と筆者自身の活動のプロセスとその意味を考察するという方法がとられたのである。ジェイムズ・クリフォードの『文化を書く』を参照したこのような記述方法の選択は、従来の美術史のアプローチでは捉えきれないフィールドでの活動の検証を可能にするものと言える。

両者のコラボレーションは、シーズンごとの山本のショーのコンセプトに基づき、朝倉が描いた平面作品をプリントにおこし、それを山本が服にするという方法と、山本がデザインした服に直接、朝倉が絵筆で描くという方法で展開した。また、朝倉はこれらの製品化した服を販売するパリや東京の店舗の壁画制作も行っている。更に、2016-2017年の冬には、コラボレーションの当初から構想されていたと

いう、山本との二人展「画と機」をオペラシティアートギャラリーで開催した。コラボレーションで実現した服と、それぞれの絵画作品を、映像、照明、音響の専門家の協力を得て、大空間で展示構成するまでを体験したのである。

本論において、「創作活動とは、広い意味でコラボレーションであり、他なるものとのやり取りを経ることによって初めて可能となるものなのだ」という仮説からスタートして、ファッションの世界の人々との体験を、コラボレーションをキーワードに記述する過程で朝倉は、絵画制作という、構想から実現までをひとりの人間が創造すると思われてきたものが、実際には多様な他者との交歓を通して行われるものであることを自覚する。あらゆる創造の過程には、様々な人間関係のはたらきがあり、作品とは文化的にも社会的にも多様な背景を持つ人々と交錯するところに成立するものであることを、人間そのものが、生まれ落ちてから死ぬまでひとりだけで生きていくことはできないのであり、他なるものとのやり取りの中で存在するという、ハンナ・アレントの「複数性」の概念を踏まえて考察している。

更に本論では、山本とのコラボレーションが、朝倉自身の絵画というメディアにおける本質的問題への考察を促すことになったことについて論じられている。修士課程で手がけた絵画では、屋外の自然を取り込んだかのような風景に覆われ断片と化していた身体は、筆触の編み目のなかに潜む存在であったが、コラボレーションを経たのち、カンヴァスには堂々と前景化した肉体が、いくつもの裂け目を伴いつつも新たなイメージを生成し、更に絵画の層として複数の時間と空間をまとうものへと変貌している。絵画空間における肉体と空間との関係はもとより、空間の中に存在する布としてのカンヴァスをめぐる朝倉の意識の変化は、山本という、身体と周囲の空間との間にある服という新しいあり方を示したデザイナーとのコラボレーションとそれをめぐる論文執筆と並走するものなのである。大学院在学中に、実社会においてファッションの世界での凝縮したコラボレーションの経験を積み、そこで得た知見を基に自身の絵画制作を新たに展開したことの意味と、自身が他者や世界に対して開かれた存在にある、即ち今も変化の過程にあるということを明らかにした本論は、本学の博士論文として十分な価値があるものと認めるものである。